

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

外集団メンバーによるステレオタイプの言及がステレオタイプ化に及ぼす影響：外集団メンバーに対する好意度との関連で

著者	田村 美恵
雑誌名	神戸外大論叢
巻	61
号	6
ページ	61-75
発行年	2010-11-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000416/



外集団メンバーによるステレオタイプの 言及がステレオタイプ化に及ぼす影響

——外集団メンバーに対する好意度との関連で——

田 村 美 恵

はじめに

本研究は、田村（2010b）の補足的研究である。田村（2010b）では、特定の集団に対して表明されたステレオタイプのな判断や意見（言及）が受容され、ステレオタイプ化されていくプロセスに関わる要因について、実証的検討を行った。

そもそも、「ステレオタイプ」は、多くの場合、「合意として共有されている」という定義的前提を有している（e.g., Gardner, 1994; Katz & Braly, 1933; Tajfel, 1982）。しかし実際に、ステレオタイプがどの程度合意／共有されているのか、その合意性が明示的に示されることは希であり、通常、それは個々人の推測に基づくしかない。このように、（社会的合意としての）ステレオタイプには、かなり主観的な認知が含まれているのであるが、こうした「曖昧さ」故に、自己のステレオタイプのな判断や認知は、他者によるステレオタイプの言及に、かなりの部分影響を受けると考えてもおかしくない。というのも、態度変容に関する古典的な心理学的研究が明らかにしてきたように（e.g., Festinger, 1954; Dutsch & Gerard, 1955; Goethals & Darley, 1977）、一般に、自分自身の判断や認知の正当性／妥当性が曖昧で不確実であるときには、人々は、他者によるそれらを参照することで、自己の判断や認知を形成、変化させることが少なくないからである。

こうした観点から、他者による言及が自己のステレオタイプの認知の形成（ステレオタイプ化）にどのような影響を及ぼすかについて検討している研究の一つに、Haslam, Oakes, McGaerty, Turner, Reynolds, & Eggins (1996) がある。そこでは、ある集団に対して、他者からステレオタイプの言及があった場合、その内容が既存のステレオタイプと一致しているか否かや、その言及の情報源が自分と同じ集団に所属する内集団メンバーであるか、あるいは自分と異なる集団に所属する外集団メンバーであるか等によって、提示された言及が受容され、当該集団をステレオタイプ的に見なす傾向（ステレオタイプ化）が促進、または抑制されることが見出されている。彼らの知見は、他者の言及に関わる要因のうち、言及のステレオタイプ一致度と情報源の違いが重要な役割を果たすことを示した興味深いものであるが、しかし、彼らの研究には、いくつかの重要な実験手続き上の問題点も指摘された（田村, 2010b）。

これを受けて、最近行った著者の研究（田村, 2010b）では、Haslam et al. (1996) の手続き的な問題点を解消し、さらに、他者の言及を構成する諸要素のうち、言及の「望ましさ」も新たな実験変数として付加し、他者の言及がステレオタイプ化に及ぼす影響について検討した。具体的には、自集団（日本人）ステレオタイプについて、Haslam et al. (1996) と同様、内集団（所属大学の学生集団）メンバー、または外集団（韓国 K 大学の学生集団）メンバーから、既存のステレオタイプと一致もしくは不一致な言及が提示された場合、かつ、その内容がポジティブやネガティブであった場合に、認知者による自集団ステレオタイプ化がどのように行われるのかについて検討した。その結果、提示された言及が（自己の信念を揺らすような）ステレオタイプと不一致なものである場合には、その情報源が誰であるかによってステレオタイプ化が左右され、外集団メンバーよりも内集団メンバーによる言及の方が、自集団に対するステレオタイプ化が促進されていた。一方、提示された言及が既存のステレオタイプと一致したものである場合に

は、情報源の違いによるこうした影響は見出されなかった。また、ステレオタイプと不一致な言及のうち、内容がポジティブな場合には、情報源の違いによって自集団に対するステレオタイプ化の程度は異ならなかったのに対して、内容がネガティブな場合には、情報源の効果が見出され、情報源が内集団メンバーであった場合の方が外集団メンバーであった場合よりも、自集団のステレオタイプ化が促進されていた。

上記の結果は、概して、自己にとって重要な「内集団メンバー」の言及が、ステレオタイプ化に際して一つの重要な「基準 (norm)」を提供し、この基準に沿った方向で、ステレオタイプ化が進んでいくことを示している。また、これに加えて、情報源の違いによる効果それ自体が、言及内容を構成する他の要素——ステレオタイプ一致度や望ましさ——の影響を受けながら、相互作用的にステレオタイプ形成や修正に関わることも示唆している。

ところで、田村 (2010b) では、「外集団」として、「韓国」という国カテゴリーを用いた。これは、本実験に先立つ予備調査 ($N=111$) において、日本を取り巻く諸外国 (環太平洋地域に所属する国を中心に、アメリカ、カナダ、ロシア、中国、韓国、オーストラリアなど) 11カ国について、それぞれ、「どの程度好きだと思うか」を7段階で評定してもらった結果に基づいて選出されたものである。予備調査の結果、「韓国」に対する好意度は、4.41 ($SD=1.20$) とほぼ中間的な (「どちらでもない」に近い) 値であり、なおかつ、韓国は、政治的、文化的に日本との関連も深く、日常的に、人々の関心に上りやすい国の一つであると思われたため、実験刺激として用いることにしたのである。

一方で、先の予備調査において、韓国に対する好意度の SD は1.20と比較的大きく、好意度には個人差があることも示唆された。実は、このような外集団に対する好意度の個人差は、それ自体が、ステレオタイプ化のプロセスに影響を与えうる重要な変数なのではないかと思われる。というのも、外集団メンバーによって発信されたさまざまな情報をどう受け取り、解釈するか

は、認知者自身が当の外集団をどのように認知・評価しているかによって大きく異なり、それが、当該言及の受容／参照のされやすさ、ひいては、ステレオタイプ化の程度をかなり左右すると考えられるからである。しかし、こうした観点から、外集団メンバーによるステレオタイプの言及の効果について検討した研究はない。

以上から、本研究では、外集団メンバーから自集団に対するステレオタイプの言及が提示された場合、それらの内容（ステレオタイプ一致度と望ましさ）に加え、外集団に対する好意度の高低が自集団のステレオタイプ化にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。

社会的アイデンティティ理論（Tajfel & Turner, 1979, 1986）が示すように、社会的アイデンティティが顕現化するような集団間状況下では、一般に、人々は、自集団を、外集団と比較して（出来る限り肯定的に）差異化しようとする傾向があるが、このような差異化傾向は、外集団を好意的に認知する場合よりも、非好意的に認知する場合に、より強まると思われる。そして、後者の場合には、前者の場合よりも、外集団メンバーから提示された自集団に対するステレオタイプの言及に、より反発を感じ（それを妥当なものとしては受容しにくく）、その結果、当該言及に沿った方向でのステレオタイプ化は抑制されると考えられる。また、こうした傾向は、提示された言及が（自己の信念と一致しない）既存のステレオタイプと不一致な場合や、自集団の評価を低下させる可能性のあるネガティブな内容である場合に、顕著に見られると予測される。

方 法

実験参加者

兵庫県下の公立の外国語大学学生233名（男性64名、女性169名）。平均年齢20.03歳（ $SD=4.70$ ）。なお、これらの実験参加者は、田村（2010b）の研

究で、「外集団メンバー条件」に割り当てられた実験参加者117名に、今回新たに追加された実験参加者116名を加えたものである。

実験デザイン

ステレオタイプ一致度（一致，不一致）×望ましさ（ポジティブ，ネガティブ）×外集団好意度（高，低）の参加者間3要因計画。外集団カテゴリーとしては，田村（2010b）と同様，「韓国K大学の学生」集団を設定した。

手続き

実験は，心理学の授業時間の一部を利用して，集団で実施した。手続きは田村（2010b）とほぼ同様であった。まず，実験参加者の社会的アイデンティティを顕現化させるため，本研究が「さまざまな国の大学生を対象とした国際比較研究の一環」であり，「日本人と韓国人の大学生を対象にして行われた Ishino, Tamura, Chung（2004）の研究をもとにしている」と告げた。その後，以下のような実験変数の操作や従属変数の測定を行った。なお，実験の進行に必要な教示等は，すべて一冊の冊子に印刷され，予め，実験参加者に配布されていた。また，参加者は，自分のペースで回答を行った。

（1）外集団に対する好意度評定

「韓国人の大学生」に対する「好感度」，及び「親しみやすさ」について，「非常に好感が持てる（7点）」～「まったく好感が持てない（1点）」，また，「非常に親しみを感じる（7点）」～「まったく親しみを感じない（1点）」まで，それぞれ7段階で評定してもらった。

(2) 自集団（日本人）に関するステレオタイプの言及の提示

初めに、「『日本人に特徴的なイメージ』に関する Ishino ら（2004）の調査結果を知らせる」と告げ、外集団メンバーである「韓国 K 大学の学生」の調査結果として、日本人（自集団）に関するステレオタイプの言及を提示した。

提示された言及は、性格特性語 3 個であり、その内容は、既存の自集団ステレオタイプと一致か不一致か、また、内容的にポジティブか、ネガティブかを組み合わせた計 4 種類あった。

その際、提示された性格特性語は、本実験に先立ち、次のような予備調査（調査協力者 111 名、男性 22 名、女性 89 名）を行い、選定した。まず、調査協力者に、日本人のステレオタイプに一致、もしくは不一致であると思われる性格特性語を 44 個提示し、各性格特性が「日本人全体のイメージにどの程度当てはまると思うか」、また、「どの程度望ましいと思うか」について、それぞれ、7 段階で評定してもらった。その後、性格特性語毎に、ステレオタイプ一致度と望ましさについての平均評定値を算出した。これらの値をもとに、ステレオタイプ一致特性、不一致特性をそれぞれ 6 個ずつ、計 12 個選出した。また、ステレオタイプ一致特性、不一致特性の内、それぞれ、半数は、望ましい（ポジティブ）と評定された特性語、残りの半数は、望ましくない（ネガティブ）と評定された特性語を選出し、刺激とした。例えば、ステレオタイプ一致・ポジティブ条件で提示された特性語は、「謙虚である、きれい好きである、忍耐強い」であり、ステレオタイプ不一致・ネガティブ条件で提示された特性語は、「気性が激しい、国粋主義的である、うぬぼれが強い」などであった。

なお、これらの性格特性語について、ステレオタイプ一致度と望ましさの各条件毎に、ステレオタイプ一致度、及び、望ましさの平均評定値を算出し、それぞれの値について、ステレオタイプ一致度×望ましさの分散分析を行った。その結果、ステレオタイプ一致度に関する評定については、一致度

の主効果のみが有意であり ($F(1,110) = 274.42, p < .001$), 一致条件 ($M = 5.31$)の方が, 不一致条件 ($M = 3.53$) よりも, 一致度が有意に高かった。また, 望ましさに関する評定については, 望ましさの主効果のみ有意であり ($F(1,110) = 438.87, p < .001$), ポジティブ条件 ($M = 5.51$)の方が, ネガティブ条件 ($M = 2.95$) よりも, 望ましさが有意に高かった。これにより, ステレオタイプ一致度は, 望ましさの水準間で, また, 望ましさは, ステレオタイプ一致度の水準間ではほぼ等しいことが確認された。

(3) ステレオタイプ化の指標：適合度の推定

Haslam et al. (1996, 実験1), 及び, 田村 (2010b) と同様, 提示された3個の性格特性それぞれについて, 日本人全体の内, 提示された性格特性が当てはまる人がどのくらいいると思うか, その割合を0~100%で推定してもらった(適合度)。その際, 推定を行いやすくするため, 『割合』は, 実際に測定することが困難ですので, この問いに対する『絶対的に正しい答え』はありません。あなたの思った通りで結構ですので, 回答してください』と教示した。なお, 適合度は, それを高く推定するほど, 自集団を等質的・ステレオタイプのみにみなす傾向(ステレオタイプ化)が促進されたことを表す。

(4) 提示された言及に対する妥当性と反発度の測定

提示された性格特性(言及)の妥当性について, 「非常に妥当である(7点)」～「まったく妥当でない(1点)」 「的を射ている(7点)」～「的を射ていない(1点)」の7段階で, 評定を行ってもらった。また, 言及に対する反発度についても, 「非常に反発を感じる(7点)」～「まったく反発を感じない(1点)」まで, 7段階で評定を行ってもらった。

結 果

1. 外集団好意度による群分け

実験参加者毎に、外集団に対する「好感度」と「親しみやすさ」の平均値を算出し、「好意度得点」とした。その後、全実験参加者の好意度得点の平均値を算出したところ、4.30 ($SD=1.08$) であったので、実験参加者のうち、好意度得点が5以上の者を、「高好意」条件に、好意度得点が4以下の者を「低好意」条件に群分けした。その結果、前者には136名、後者には97名が割り当てられた。なお、ステレオタイプ一致度（一致、不一致）、望ましさ（ポジティブ、ネガティブ）、外集団好意度（高、低）の各実験条件毎に、外集団好意度の平均値を算出し、それらの値について、ステレオタイプ一致度×望ましさ×外集団好意度の分散分析を行ったところ、外集団好意度の主効果のみ見出され ($F(1, 225)=325.73, p<.01$)、その他の要因の主効果、及び交互作用は見出されなかった。

2. 適合度の推定について

各実験条件毎に適合度の平均推定値を求め（表1）、それらの値に対して、ステレオタイプ一致度×望ましさ×外集団好意度の分散分析を行ったところ、ステレオタイプ一致度の主効果が有意であり ($F(1, 225)=114.46, p<.01$)、ステレオタイプと一致した言及 ($M=56.42$) の方が不一致な言及 ($M=39.31$) よりも、適合度を高く推定されていた。また、ステレオタイプ

表1 各実験条件における適合度の平均推定値 (SD)

ステレオタイプ一致度	望ましさ	外集団好意度	
		高好意	低好意
一 致	ポジティブ	52.88 (13.44)	54.26 (12.11)
	ネガティブ	57.39 (11.97)	60.99 (10.35)
不 一 致	ポジティブ	45.03 (13.49)	42.42 (12.10)
	ネガティブ	39.16 (12.03)	31.27 (9.69)

一一致度×外集団好意度 ($F(1, 225)=5.99, p<.05$)、ステレオタイプ一一致度×望ましさ ($F(1, 225)=19.97, p<.01$) の交互作用が有意であった。

まず、ステレオタイプ一一致度×外集団好意度の交互作用について、下位検定を行った結果、ステレオタイプ不一致条件においてのみ、外集団好意度の単純主効果が有意であり ($F(1, 225)=4.57, p<.05$)、高好意条件 ($M=42.16$) よりも低好意条件 ($M=37.34$) の方が適合度が低く推定され、自集団に対するステレオタイプ化が抑制されていた。一方、ステレオタイプ一致条件においては、このような外集団好意度の違いによる効果は見出されなかった ($F(1, 225)=1.16, n.s.$)。これは、予測と一致する結果であった。

また、ステレオタイプ一一致度×望ましさの交互作用について、下位検定を行ったところ、ステレオタイプ不一致条件では、評価の単純主効果が有意であり ($F(1, 225)=15.80, p<.01$)、言及がネガティブな場合 ($M=34.63$) の方が、ポジティブな場合 ($M=43.45$) よりも適合度が低く推定され、自集団に対するステレオタイプ化が抑制されていた。また、ステレオタイプ一致条件でも、評価の単純主効果が有意であったが ($F(1, 225)=6.93, p<.05$)、この場合には、逆に、言及がネガティブな場合 ($M=59.45$) の方がポジティブな場合 ($M=53.68$) よりも、適合度を高く推定され、ステレオタイプ化が促進されていた。こうした傾向は、外集団に対する好意度の違いにかかわらず生じていた。なお、予測した望ましさと外集団好意度との関連は見出されなかった。

3. 妥当性判断について

提示された言及に対する妥当性判断について、実験参加者毎に妥当性に関する2項目の評定値の平均を算出し、「妥当性得点」とした。その後、各実験条件毎に、全実験参加者の妥当性得点の平均値を算出した。それらの値について、ステレオタイプ一一致度×望ましさ×外集団好意度の分散分析を行ったところ、ステレオタイプ一一致度の主効果が有意であり ($F(1, 225)$

=1888.58, $p<.01$), 提示された言及がステレオタイプと一致している場合 ($M=4.73$) の方が不一致な場合 ($M=3.17$) よりも、妥当性が高く認知されていた。また、外集団好意度の主効果も有意であり ($F(1, 225)=4.23$, $p<.05$), 外集団に対する好意度が低い場合 ($M=3.86$) の方が高い場合 ($M=4.11$) よりも、提示された言及の妥当性が低く認知されていた。

また、ステレオタイプ一致度×望ましさの交互作用が有意な傾向を示した ($F(1, 225)=3.39$, $p<.10$) ので、下位検定を行ったところ、提示された言及がステレオタイプと不一致な場合においてのみ、望ましさの単純主効果が見出され ($F(1, 225)=4.54$, $p<.05$), 言及がネガティブである場合 ($M=2.99$) の方がポジティブである場合 ($M=3.33$) よりも妥当性が低く認知されていた。一方、提示された言及がステレオタイプと一致している場合には、望ましさに関わらず、妥当性は同程度であると判断されていた。

4. 反発度について

各実験条件毎に、反発度の平均評定値を求め、それらの値について、ステレオタイプ一致度×望ましさ×外集団好意度の分散分析を行った。その結果、望ましさの主効果が有意であり ($F(1, 225)=76.91$, $p<.01$), ポジティブな言及 ($M=2.67$) よりもネガティブな言及 ($M=4.22$) に対して、反発度が高かった。また、外集団好意度の主効果も有意な傾向を示し ($F(1, 225)=3.41$, $p<.10$), 外集団に対する好意度が低い場合 ($M=3.53$) の方が、高い場合 ($M=3.23$) よりも、反発度が高くなる傾向が見出された。なお、1次、及び2次の交互作用はいずれも有意ではなかった。

考 察

本研究では、外集団メンバーから、自集団に対して、ステレオタイプの言及が提示された場合に、言及内容のステレオタイプ一致度と望ましさ、及

び、外集団に対する好意度が自集団のステレオタイプ化にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。

その結果、全体的に見れば、自集団に関して、既存のステレオタイプと一致する言及が提示された場合の方が、ステレオタイプと不一致な言及が提示された場合よりも、当該言及に沿った方向でのステレオタイプ化が促進されていたが、特に、提示された言及がステレオタイプと不一致な場合には、その情報源（外集団）に対する好意度の違いがステレオタイプ化に影響を及ぼしていた。具体的には、外集団に対する好意度が低い場合の方が、高い場合よりも、当該言及の適合度が低く推定され、自集団をステレオタイプ的に見なす傾向が弱かった。既存の（自集団）ステレオタイプに不一致な言及は、自己の有するステレオタイプの信念（自集団イメージ）に疑義を差し挟むものともなり得る。このような自己の信念を揺らしうるような言及が非好意的感情を抱いている外集団メンバーから提示された場合には、それが内集団メンバー（田村（2010b）を参照）や好意を抱いている外集団メンバーから提示された場合よりも、より強い反発を感じやすく、容易には受容されにくかったものと考えられる。実際、このことは、妥当性や反発度に関する結果にもよく表れていた。すなわち、提示される言及内容がたとえ同一であっても、情報源である「外集団」に対して非好意的な実験参加者たちは、好意的な参加者たちよりも、当の言及の妥当性をより低く認知し、また、言及内容への反発をより強く感じていたのである。

このような結果は、非好意的感情を抱いている外集団から、自己が所属する内集団を出来るだけ差異化／距離化しようとする動機づけの現れであるとも見なすことが出来る。さらに、こうした考えに基づけば、外集団に対して、非好意的、敵対的感情を抱いていればいるほど、外集団メンバーから提示された言及に対して、反動的な認知や態度が形成されやすくなるという可能性も指摘できる。

例えば、Haslam et al. (1996) では、外集団メンバーから提示された特

性（言及）がステレオタイプと一致している場合には、その特性の適合性が低く推定され（反ステレオタイプの認知が強められ）、提示された特性がステレオタイプと不一致な場合には、逆に、当該特性の適合性を高く推定する（ステレオタイプの見方を強める）という反発的（reactive）な現象が見出されていた。このように、かなり明確なかたちで反動的／反発的な認知が形成されたのは、彼らの研究で設定された「外集団」が、「偏見を有する人々（prejudiced people）」という、通常なら、負の感情を強く感じるような集団カテゴリーであったところによるものも大きいのではないだろうか。すなわち、Haslam et al. (1996)に見られる反発的な認知形成は、自集団を（望ましさの乏しい）外集団と差異化・距離化したいという動機づけが強く働いた結果、見出されたものではないかとも考えられる。

本研究では、予測に反し、外集団に対する好意度の違いは、言及の望ましさの効果とは直接関連していなかった。すなわち、外集団好意度の高低に関わらず、ステレオタイプと不一致な言及が提示された場合には、内容がネガティブなものの方が、ポジティブなものよりも、適合度を低く推定され、自集団の（ネガティブな方向での）ステレオタイプ化が抑制されていた。これは、自集団の評価を低下させてしまう可能性のあるネガティブな言及を積極的には受け入れないことで、自集団の評価を維持しようとする動機の現れであると考えられ、今回の結果は、こうした動機が、外集団に対する好意の多少を超えて生じることを示唆している。ただし、本研究では、好意度の操作を、一つの外集団に対する好意度の個人差という側面で行った。そのため、好意度の操作の効果（強力さ）に関しては、一定の限界があることも否めない。今後は、好意度に関するより強力な実験操作——例えば、好意度の異なる2つの外集団（メンバー）が言及の「情報源」である場合を比較するなど——を行った場合にも本研究と同様の結果が得られるのかについて、確認していく必要があるだろう。

また、本研究では、予測を超える結果についても得られた。それは、ステ

レオタイプと一致した言及が提示された場合、内容がポジティブな場合よりもネガティブな場合の方が、（ネガティブな方向での）ステレオタイプ化が促進されるという結果である。これは、言い換えれば、自集団、延いては、そこに所属する自己の評価を低下させる可能性のあるネガティブな（批判的な）言及を、積極的に受け入れた結果であるとも見なせる。自（内）集団を批判的に捉えるこうした傾向は、著者の行った別の実験でも見出されている（田村, 2008, 2010a）。

北山（1998）は、「自集団（自己）批判」傾向が、謙遜——公の場での自己批判——とは別に、望ましくない自集団（自己）関連情報を自主的、積極的に取り込むことによって生じる可能性を指摘している。そして、こうした傾向が生じるのは、日本人が、自己批判的に、自己（自集団）に欠けている点、短所などを見出し、それらを克服、もしくは補おうと、社会生活において不断に努力するという営み（やり方）に文化的・慣習的に動機づけられているからだとする。今回の実験のみでは、こうした説明の妥当性は検証しえないが、このような指摘を考慮すれば、日本人ではなく、欧米人を対象とした実験では、本研究と異なる結果が得られる可能性もあるだろう。というのも、欧米人は、日本人（東アジア人）などとは異なり、自己（自集団）の望ましい属性を積極的・肯定的に評価しようと動機づけられていると考えられる（北山, 1998）ため、自集団（自己）の評価を高揚させうるポジティブな言及をこそ、積極的に受け入れ、その方向での（自集団の）ステレオタイプ化が促進されると考えられるからである。今後は、ステレオタイプ形成過程について、こうした文化的差異も視野に含めながら検討していく必要もあるだろう。

最後に、今後の課題について述べておきたい。本研究では、（自己認知の）ステレオタイプ化の程度を捉える指標として、Haslam et al.（1996, 実験1）や田村（2010b）との比較可能性を考慮し、「適合度」という指標を用いた。先述のように、これは、当該集団をどの程度等質的なものと見なして

いるかという等質性認知の観点から、ステレオタイプ化の強さを測るものである。一方、冒頭にも述べたように、ステレオタイプ化には、特定の認知や判断（言及）に対して、自分以外の他の人々がどの程度それに賛同しているとなすのか——すなわち、「合意性」の認知も重要な役割りを果たすと考えられる。というのも、提示された言及が、「合意性」の高いものであると判断されれば、そうした言及は、「妥当」なものとして、集団イメージを形成する際の「係留点（anchoring point）」として積極的に利用され、ステレオタイプ化促進の原動力になると思われるからである。本研究では、先述のように、妥当性判断に関する評定と適合性認知（ステレオタイプ化）との関連について考察を行ったが、今後は、「合意性」を測定する指標も従属変数として加えるなどして、合意性推定と妥当性判断、及び、ステレオタイプ化の3者関係について、より包括的な検討を行っていく必要があるだろう。

引用文献

- Duetsch, M., & Gerard, H. B. 1955 A study of normative and informative social influences upon individual judgment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 629-636.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Gardner, R. C. (1994). Stereotypes as consensual beliefs. In M. P. Zanna & J. M. Olson (Eds.), *The psychology of prejudice: The Ontario Symposium* (Vol. 7, pp.1-31). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Goethals, G. R., & Darley, J. M. (1977). Social comparison theory: An attributional approach. In J. Suls & R. L. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives*. Washington, DC: Hemisphere.
- Haslam, S. A., Oakes, P. J., McGaerty, C., Turner, J. C., Reynolds, K. J., & Egghins, R. A. (1996). Stereotyping and social influence: The mediation of stereotype applicability and sharedness by the views of in-group and out-group members. *British Journal of Social Psychology*, **35**, 369-397.
- KatzD., & Braly, K. W. (1933). Racial stereotypes of one hundred college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **28**, 280-290.

- 北山忍 (1998). 認知科学モノグラフ⑨ 自己と感情——文化心理学による問いかけ
—— 共立出版.
- Tajfel, H. (1982). Social psychology of intergroup relations. *Annual review of Psychology*, **33**, 1-39.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of social conflict. In W. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks/Cole. pp.33-47.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In W. Trobe & W. G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup relations* (2nd edn, pp.7-24). Chicago: Nelson-Hall.
- 田村美恵 (2008). 集団間の競争的, 非競争的関係が社会的投射に及ぼす影響 神戸外大論叢, **59**(1), 73-90.
- 田村美恵 (2010a). 集団間状況下での合意性推定——自己, 内集団他者, 外集団他者に関する手がかり情報の影響について—— 実験社会心理学研究, **50**, 37-48.
- 田村美恵 (2010b). 内集団または外集団メンバーによるステレオタイプの言及が自集団のステレオタイプ化に及ぼす影響 日本社会心理学会第51回大会発表論文集, 504-505.

